

現実に対する芸術の美学的関係

エン・チェルヌィシエフスキー氏の著作
サンクト・ペテルブルク 1855年

(自著自評)

訳 石山 正三



この冊子について

池 昌志

チェルヌイシェフスキーの「自著自評」といえば、学生時代には芸術論の「教科書」として、また愛称「チェル」としていつも座右あったものだ。チェルヌイシェフスキーが自らの著作に自ら評論する形で芸術論（美学）を展開しているのだが、人間と現実に対する関係が弁証法的唯物論的に展開されており、芸術論以上の哲学書ともなっている。

最近インターネットの発達により、圧倒的な情報が検索できるようになった。私も、いろいろ検索してみた。まず、北海道大学の出かづ子氏によるチェルヌイシェフスキーに対する研究。その中に自著自評の引用があり（1969年）、その訳文が私の手元の冊子と酷似しているの、何かつながりがあるかもしれない。

出かづ子氏によると、ニコライ・ガヴリーロヴィチ・チェルヌイシェフスキーが学位論文「現実に対する芸術の美学的関係」（脱稿は1853年、出版は1855年）に対し、自らの論文を批評する形で発表したのは1855年、とのことである。（出かづ子：チェルヌイシェフスキーの美学理論：『現実に対する芸術の美学的関係』を中心として1969年）

とにかく、私たちが学生時代から取り組んできた芸術論を完成させたいという思いから、「自著自評」を読みやすい形で提供しよう、というのがこの冊子を作った動機である。

2017年8月5日 フロイント・コール同窓会の日

<訳者について>

石山 正三（いしやま しょうぞう、1914年2月23日 - 1973年11月14日）は、日本のロシア語学者、ロシア文学研究者。

東京出身。東京外国語学校ロシア語科卒。1941年、東京外国語学校講師。戦後、東京外国語大学助教授となり、1964年に教授。在職中に死去。（ウィキペディア 2017）

<本文中に出てくる「注」の色について>

青… 訳者注および編者の注

橙… 編者の疑問

赤… 編者が重要と考えたキーワードなど

なお、本文の見出し・小見出しは、編者が加えたものです。

<表紙の写真>

ニコライ・ガヴリーロヴィチ・チェルヌイシェフスキー

Николай Гаврилович Чернышевский

（ウィキペディア 2017）

現実に対する芸術の美学的関係

エン・チェルヌィシエフスキー氏の著作
サンクト・ペテルブルク 1855 年

(自著自評)

訳 石山 正三

まえおき——ヘーゲルからフォイエルバッハへ——

今日まで支配的である美学的諸理念がそのなかから発生したところの諸概念の体系*1は、今日では、世界および人間生活に対する他の見解*2に席を譲った、それは幻想にとってはより魅力的でないかも知れないが、自然、歴史、道徳諸科学の今日の発達の下における厳密な、先入見のない事実の研究が与える諸結論とより適合するものである。

われわれの検討する書物の著者は考えている、自然および人間についてのわれわれの一般的諸概念への美学の緊密な依存のもとにおいては、これらの諸概念の変化とともに、美学の理論もまた改造をうけなくてはならないと。もとの理論に代わって提示されている著者自身の理論がどの程度まで正しいか、われわれは決定をひかえよう——これは時が決するであろう、またチェルヌィシエフスキー氏自身もみとめている、「彼の叙述の中に不完全、不十分あるいは一面性が見出されるかも知れない」と、しかし実際承認することが必要である、支配的な美学的信念は、前世紀末および今世紀初には形而上学的基礎の上に自信にみちて聳立*3していたのであったが、この基礎を現代の分析によって

*1 ヘーゲルの哲学体系。
*2 フォイエルバッハの唯物論的見解。

*3 聳立(しょうりつ)
…高くそびえ立つこと

奪われたのであって他の支柱を求めるか、あるいはもし厳密な分析によって再び確証されないならば、他の諸概念に席を譲らなければならないことを。

著者は強く確信している、芸術の理論は新しい形をとらなければならないと、——それは実際そうあるべきはずであるとわれわれは予想するにやぶさかでない、なぜならば一般的哲学的建築が改造される時、その一部を保全させることは困難だからである。

一体いかなる精神において芸術の理論は変化しなければならないか。「現実生活への尊重、たとえ幻想にとって快いものであろうとア・プリオリな仮説に対する不信——これこそ今日科学のなかで支配的な潮流の性格である」と著者はいう、そして彼には思われる、「われわれの美学的信念をもこの分母に通分することが必要だ」。

この分母に通分する

ヘーゲルを捨て去るのではなく、唯物論の土台にのせる

この目的を達するために著者はまず、美なるもの、崇高なるもの、悲劇的なるものの本質についての、現実に対する幻想の関係についての、現実に対する芸術の優越についての、芸術の内容および本質的意義についての、あるいは芸術作品創造への人間の志向がそのなかから生じてくることの要求についての従来の諸概念を分析に付している。これらの諸概念が批判に堪えないことを、彼の思うところでは、明らかにした後、著者は諸事実の分析から現代において科学のとっている諸理念の一般的性格に、著者の意見では、より相応しているところの新しい諸概念をひき出そうとつとめている。

すでに述べたとおりわれわれは、著者の意見がどの程度まで正当あるいは不当であるか決定しようとするものでなく、その意見を叙述し、特にわれわれをおどろかせたところの欠陥を指摘するにとどめる。文学と詩

とはわれわれロシア人にとっては、それがいずこにおいてももっていないほどの、とはっきりいうことができる、絶大な意義をもっているので、著者のふれている諸問題は読者の注意に値するものとわれわれには思われる。

しかし実際注意に値するか、この点は大いに疑いうるものである、なぜならば著者自身この点をあまり確信していないらしいからである。彼は自分の研究のための題目の選択を弁明する必要を認めている。

「今日はモノグラフ*4の時代である、——と序文において著者はいう、——で私の著作は時世にあわぬとの非難にあうかも知れない。なぜ著者は現実に対する芸術の美学的関係のような、かくも一般的な、かくも広範囲な問題を自分の研究題目に選んだか。なぜ彼は今日大部分なされているようになにか特殊問題をえらばなかったか。——「著者には思われる、——と彼は自分の弁明として言っている、——科学の基礎的諸問題を論ずることが無益であるのは、それについてなに一つ新しいこと、確固たる根拠あることをいい得ない時だけである。しかしわれわれの専門科学の基礎的諸問題に対する新しい見解のための材料が作り出された時には、これらの基本的諸理念を述べることができもするし、また述べなくてはならない、もしもまだ美学について語る価値ありとすれば」。

*4 モノグラフ…ある一つの問題に関する研究を記した論文

しかしわれわれには思われる、著者は事態を完全に明白に理解していないか、あるいはまたきわめて秘密的である。われわれには思われる、著者は無益にも、自分の著作に次のような序文を書いた作家のまねをしたのである、すなわち「わたしの著作は古ぼけた駄物であって、それゆえに今日においては、私によってその本質が明らかにされているところの事物について少しも論ずべきものではない。しかし多くの人々が自分の頭脳

のためにより生き生きした仕事を見出していないのであるから、かれらにとつては私によって企画される出版も無益ではないであろう。

もしもチェルヌィシェフスキー氏がこの極端な率直さになろう決心ならば、彼は序文においてこういい得たはずである、「正直に言えば、美学的諸問題を論ずる特別の必要はない、科学のなかでそれが背景に立っている現代においては。しかし多くの人々がはるかに少ししか内的実質をもたない事物について書いているのであるから、私もまた、思想のためにたとえいくらかなりと興味を提供する美学について書く完全な権利を有したのである。」著者はまたこういい得たはずである、「もちろん美学よりもっと興味ある諸科学が存在する。しかし私はそれらについて何も書き得なかった。他の人々もそれらについて書いていない。然して「よりよいもの

*5 ページ数は「学位論文」のもの。以下同様。

の欠除のために人間はよりわるいものに満足する」(109頁)*5 ものであるから、親愛なる読者諸君よ、

「現実に対する芸術の美学的関係」に満足し給え。かような序文は率直でもあり、立派なものであるはずだ。

実際に、美学は思想にとって若干の興味を提供しうる、なぜならばその諸任務の解決は、他の、より興味ある諸問題の解決に依存しているからである、そしてわれわれは期待する、この学についての立派な著作を知っている人はなんびともこれに賛成するであろうことを。

しかしチェルヌィシェフスキー氏は、美学が自然および生活についての諸概念の一般的体系と密触している箇所をあまりに足早に通過している。支配的な美学理論を叙述するに当たって、彼はこの理論がいかなる一般的基礎の上に築かれているかについてほとんど語らず、「思想の樹」(若干の自家製思想家の例にならって、「イーゴリ遠征物語」の表現を用いよう)の一枝、特に彼の関心をひく枝のみを一葉ごとに検討しているが、

このような枝を生んだのはいかなる樹であるかをわれわれに説明していない、かかる黙殺は明白さのためには少なからず不利であることは知れたことであるのに。

これと全く同様に自分自身の美学的諸概念を叙述するに当たっても、著者はそれを美学の領域内から引用された事実のみをもって裏書きするだけであって、一般的原則を叙述していない、その美学的問題への適用から彼の芸術理論が形成されたところの一般的原則を、しかも彼自身の表現に従えば著者は「生活および世界についての科学の現代的諸概念によってあたえられるところの分母に、美学的諸問題を**通分**している」にすぎないのに。これは、われわれの意見では、**重要**な欠陥である、そしてそれは、著者のとっている理論の内的意義が多くの人々にとって曖昧に見え、著者によって展開される思想が著者自身に属するものと見えることの原因であるが、——それに対して彼は、われわれの意見では、最少の権利をももち得ないのである。

通分

p2参照

著者自身語っている、もし著者によって却けられている従来の芸術理論が今日まで美学教程のなかに保存されているにしても、「彼のとっている見解は文学および生活のなかに絶えず述べられている」（115頁）と。彼自身言っている。「われわれのとっている芸術観は、最新のドイツ美学者たちのとっている（そして著者によって反駁されている）諸見解から発生する、そしてそれから弁証法的過程を通じて発生するものであるが、この過程の方向は現代科学の一般的諸理念によって決定されているのである。かくて直接にはこの芸術観は諸理念の二つの体系——一方において今世紀初頭のそれと、他方において最近2～30年間（20年間——と評者からつけ加えよう）のそれと（113頁）、しかもなおなにゆえ、とわれわれはたずねる、一般的世界観のこの二つの体系を、必要なる限りにおいて、叙述しないのであるか。おそらく著者自身をのぞけばまずなん

人にも全く不可解な、そしてとにかくきわめて目に立つ誤謬である。^{*6}

^{*6} もちろんこれらの非難は検閲に対して向けられるべきものである。

著者によって提示される理論の単純な叙述者の役割をひきうけた評者は、著者自身が自分の思想の説明のためになすべきはずであるが、なさなかつたところを果たさなければならぬ。

いつわりの願望

近頃では人間の「現実的な、真剣な、真実の」願望、志向、欲求は、「それらを述べあるいはそれらを持つと空想している人間自身の眼中においても現実的な意義をもっていない、仮想的な、幻想的な、空虚な願望、志向、欲求とは区別されることがかなり多い。仮想的な、幻想的な志向、実は全くその人には無縁な志向が、すこぶる発達している人間の例として、「現代のヒーロー」^{*7}におけるグルシニーツキーなる見事な人物をあ

^{*7} 「現代のヒーロー」
レールモントフの作品。

げよう。このおかしなグルシニーツキーは自分の少しも感じていないことを感じようとし、本来自分に

とってなんら必要でないものをかち得ようとしよけんめいに骨折る。彼は負傷することを望み、彼は一兵卒であることを望み、恋愛において不幸であり、絶望におちいること等々を望む、——彼は彼にとって魅惑的なこれらの性質や幸をもたずしては生活できない。しかし運命がもし彼の願望をみたそうという気にでもなったら、どれほど悲しい打撃を彼にあたえることだろう。もし彼がどんな少女にせよ彼を恋しないかも知れないと考えたら、永遠に恋愛を放棄するであろう。彼は自分がまだ将校でないことをひそかに気に病んでいて、待望の昇進の通知をうけると、口さきではあれほどほりにしていた自分の従来の服を軽蔑とともにすてさる。おのおのの人間にグルシニーツキーの一分子がある。一般に人間はいつわりの環境にたつとき多くのいつわりの願望をもつものである。従来はこ

の重要な事情に注意を払わず人間がなにごとについても夢想する傾きをもっていることに気づくやいなや、病的なあるいはひまつぶしの空想のあらゆる気まぐれを、人間性の必ず充足を要求する根本的なまた不可分な欲求であると宣言したのであった。また人間においてなんでもかでも不可分の欲求とされないものはなかった。人間のあらゆる願望と志向とははてしらぬもの、あくなきものと公言された。いまではこれはより大なる慎重さをもってなされている。いまでは一定の願望がいかなる事情のもとで発達し、いかなる事情のもとで鎮静するかが検討されている。その結果きわめてささやかな、それと同時にまたきわめて喜ぶべき事実が明らかになった、本質において人間性の欲求はきわめて穏健なものであって、それが幻想的に膨大な発達をとげるのは、極端さの反動としてのみであり、不順な事情が人間を病的にまで刺戟した場合のみであり、いくらかでも相応な充足の完全な欠除に際してのみであるという事実が。人間の最大の激情でさえ「激流となってわきたつ」のは、あまりに多くの障害にであう時だけである。そして人間が順境におかれるときには、その激情はたぎりたつことをやめ、そして自分の力をたもちながら、無秩序性を、すべてをのみつくす貪欲さと破壊性を失う。健全な人間は決して気まぐれでない。チェルヌィシェフスキー氏にあっては若干のかような例が——偶然的にまたいろいろな場所に——引用されている。「人間の願望は際限なし」とかいう意見は、と彼はいう、通常理解されている意味においては、「いかなる現実もそれを満足させることができない」という意味においてはいつわりである。それどころか人間は「現実にありうべき最善なるもの」に満足するだけでなく、かなり月並な現実にも満足するものである。実際に感ぜられているところのことと、単に口さきでいわれているだけのことを区別する必要がある。願望が空想によって熱病的強度にまで刺戟されるのはたとえかなり簡素ではあるにしても健全な食物が完全に欠除している場合のみであ

この定義は
一般論として成立するのかわ

る。これは人類の全歴史によって証明され、生活し自分を観察したこと

この法則は正しいのか？

のあるすべてのものが自分の身に思い知っている事実である。この事実は、人間生活の一般的法則の

一部をなすものである、激情なるものはこの激情に身をまかせる人間の異常な立場の結果としてのみ、またなんらかの激情が発生する源泉であるところの、自然な、かつ本質においてかなり平穏な欲求が相応する満足を、平穏にして決して巨人的なものでない満足をあまりに久しく見いださない場合にのみ、異常な発達をとげるものであるという法則の。人間の肉体があまりに激烈なあまりに強度な満足を要求しないしまたそれに耐えることができないことはうたがいない。また健全な人間にあっては志向は肉体の力に相応していることも疑いない。ただしここで人間の「健康」とは道徳的健康をも意味していることを指摘する必要がある。熱情、高熱は感冒の結果としておこる、激情、道徳的熱病も同様な病気であって、やはり人間が不順な諸事情の破壊的影響を受けたときに人間をとらえる。

激情は病気と同じ
障害が愛を燃え上がらせる

実例は遠くに求めるまでもない、数百の煽情的な小説に記述されている激情、主として「愛」は、

障害が除去されて愛し合う二人が結婚によって結ばれるやいなや、その激しさを失う。このことは夫妻が、ふたりの結合を障害が妨げていた嵐の時期におけるほど強く愛し合っていないことを意味するか。決して然らず。もし夫妻が睦まじく幸福に暮らしてゆくならば、二人の相互の愛着は年とともに強まり、ついに彼等が文字通りにたがいに相手なしでは生きられないほどにまで到達し、もし二人のいずれかが死にでもすると、他の一人にとっては生活は永遠にその楽しさを失う、口さきだけでなく文字どおりの意味において失うものであることは、何人も知るところである。しかもこのきわめて強烈な愛は実際なんら激しいものを示さない。なぜか。障害が愛を妨げていないというだけの理由によって。幻想的に度はずれな空想は、われわれが現実においてあまりに乏しいときにのみわれわれ

をとらえる。むき出しの板の上に横たわっているとき人間は鴨の毛の羽毛蒲団について空想することがある（とチェルヌィシェフスキー氏はつづけていう）、しかしながら健康な人間は、彼が豪奢ではないが、かなりやわらかくて具合のよい寝床をもっているとき、鴨の羽毛蒲団について空想する動機も衝動も見いださない。もし人間がシベリヤのツンドラの中に住むことを余儀なくされたならば、彼は珊瑚の枝をもち、エメラルドの葉をもち、ルビーの実をもち、地上にかけてみない樹木の茂った魔法の庭園をゆめみるかもしれない。しかしせいぜいクールスク県かキエフ県へでも移住して、豪奢ではないが、林檎樹や桜や梨のある相当な庭園を心ゆくまで逍遥する完全な可能を得るならば、空想家はきっと「千夜一夜」の庭園だけでなく、イスパニヤのレモンの茂みのことも忘れてしまうであろう。想像がその空中楼阁をきずくのは、実際にはよい家どころか、がまんのできる小屋さえないときである。想像は感覚が多忙でないときに活躍するのである。現実における満足すべき環境の欠如こそ幻想の生活の源泉である。しかし現実がいくらかでもましになってくるが早いか、想像のあらゆる夢はわれわれにとって現実に比して退屈であおざめたものになってくる。このあらいがたい事実、一見豪奢で輝かしい空想が、現実生活の諸現象がわれわれを圍繞*8するやいなや、不満足なものとしてわれわれに忘れられ見すてられる事実は、想像の夢がその美と魅力とにおいて、現実がわれわれにしめすところのものに遠く及ばないことの疑いなき証明である。科学の超越的な体系がその影響のもとにおこった古びた世界観と、自然と生活とに対する科学の今日の見解とのもっとも本質的な差異がこの概念のなかに存する。今日では科学は空想に対する現実の

*8 圍繞（いじょう）
…回りを取り囲んでいること。

現実の高い優越
・意識が現実から生まれ
→必然性が理解できなければ
→不安・不満が生まれる
→これが幻想の温床。

高くより美しいとみていたのである。文学の領域では空想的な生活へのこの従来の偏重はロマンチズムによって表現されていたが、その奇形と内的貧弱とはすでに久しく全ての人にみとめられている。

幻想の本質

しかし、われわれの述べたごとく、従来は幻想的な夢と人間性の真の志向との相違、人間の頭脳と心とが実際にその充足を要求する欲求と、かりにもし実際に存在したところで人間がその中に空虚と寒さと飢餓だけしか見いださず、従ってその中に住む気はおこさないはずであるところの空中楼阁との相違に注意を払わなかったのである。ひまな幻想の夢はみたところきわめて輝かしい。健康な頭と健康な心との願望はきわめてひかえめである。それゆえに分析が、空虚な空間を跳梁する幻想の夢がいかにか蒼白くみじめであるかを示すまで、思想家はこれらの夢のみせかけは輝かしい色彩にあざむかれ、人間が生活においてみうける事物や現象よりも、これらの夢をより高いものとしたのである。しかしわれわれの幻想の力が、われわれの経験で知っている事物や現象より高く上昇することができないほど弱いというのは実際であろうか。このことはきわめてたや

幻想の力

人間の認識が現実と根差している以上、現実より「高い」ものであるはずがない。

すくさとることができる。各人がたとえば、自分が現実にみた美しい容貌よりもっと美しい容貌をもつ美人を想像してみるがよい、——もしも自分の想像がつくり出そうと努力する形象を注意深く検討し

さえすれば、各人が気づくであろう、これらの形象は、自分の眼でみることできた顔より少しもまさっていないこと、「私は私がみたところの生きた顔より美しい人間の顔を想像したい」と考えることはできるが、これらの顔より美しいなものかを想像のなかに思うかべることにはできないことを。想像は、もし現実より高く上昇せんとするならば、きわめて不明瞭な漠然たる輪郭を描くだけであって、その中にわれわれははっきりした

もの、実際に美しいものをなに一つとらえることができないであろう。同じことが他のあらゆる場合にもくりかえされる。私は明瞭にかつ確定的に想像することができない、たとえば、現実食に食べたことのある料理よりも美味であるような料理を、私が現実食にみた光よりもより明るい光を（たとえばわれわれ北国の住民は、あらゆる旅行者たちの一致した批評によれば、熱帯諸国の大気をつらぬくまばゆい光について最小の概念をもつことができない）、われわれがみた美よりすぐれたなものをも、現実生活において体験した享楽にまさるなものをも想像することができないの

である。チェルヌィシエフスキー氏においてわれわれはこの思想をも発見する、しかしそれは偶然的にあっさりと、しかるべき展開なしに述べられているにすぎない。創造的幻想の力は、と彼はいう、すこぶるかざられたものである、それは異質の諸

体験していないものは想像できない

これは、新しい発想など持てない、ということの意味するのではない。認識の発展は新しい発見・発想をもたらす。

部分から事物を組立てるか（たとえば鳥の翼をもつ馬を想像する）、あるいは事物の大きさを拡大するか（たとえば象ほどの大きさの鷲を思いうかべる）することができるだけである、しかしわれわれが現実生活において見あるいは体験したものよりもより強度なるものを（たとえば美しさにおいてよりまさるもの、より明るいもの、より生き生きしたもの、より魅力あるもの等々）われわれはなにひとつ想像し得ないのである。私は太陽を現実食に太陽がそう見えるよりも大きさにおいてずっと大きいものとして思いうかべることができる、しかし現実食に私に見えたよりもっと明るいものとして私はそれを想像することはできない。これと全く同様に私は、私は見た人々よりもっと丈の

明るい
例として、無理がないか？

高い、ふとった等々の人間を思いうかべることができる、しかし私が現実食においてみたことのある顔よりもっと美しい顔を私は想像することができない。しかるに言うことはなんでも言いたいことが言える、鉄製の黄金、暖かい氷、砂糖の苦みなどということもできる、——もっともわれわれの

想像できない

「絵にも描けない美しさ」は絵に描けないのだ。

想像は暖かい水、鉄製の黄金を思いうかべることで

できないので、これらの文句はわれわれにとって全く空虚なものとして、幻想にとってなんの意味ももたないものとしてとどまるのであるが。しかしこのたぐいの閑文句^{*9}は幻想にとってとらえ

^{*9} 閑文句? (閑文字=かんもじ…無駄な字句・言葉)

がたいものとして残り、幻想はそれらの文句が語るところのものを想像すべく空しく努力するにすぎない

という事情に立ちいらぬならば、空虚な文句を幻想の達しうる観念と混同して、幻想の夢は現実よりはるかに豊富で、完全で、豪華であるなどと考えることができる。

ロマンティシズムの源泉でもある

この誤りによって、幻想的な(ばかばかしい、それゆえに幻想そのものにとってさえ明らかでない)夢が人間の真の欲求とみなされなければならないとの意見にまで達したのである。ひまな想像によって考え出されるあらゆるもったいぶった、しかし本質において意味をもたない、言葉の組み合わせが人間にとって最高度に魅力的なものといいたてられたのである、実際には人間はひまつぶしにそれらの言葉をたわむれとするにすぎず、それらの言葉によって明白な意味をもつ何ものをも思いうかべるものでないにもかかわらず。現実はいくらの夢に比して空虚でありつまらぬものであるとさえ宣言された。実際現実の林檎はアラディンの庭のダイヤモンドやルビーの果実にくらべてなんとみじめなものであろうか、現実の金と現実の鉄は、黄金の鉄にくらべて、金のように輝かしくまたさびず鉄のように廉価で堅いこのふしぎな金属にくらべてなんとみじめなものであろうか。われわれの近親や知己の生きた人々の美は、幻想の世界のふしぎ

^{*10} シルフィーダはローマ神話で森に住む仙女。ゲーリヤは回教徒の天国に住む美女。ペーリはペルシャ神話の天使。

な生物、あの表現の力も及ばず想像の力も及ばないほど美しいシルフィーダや、ゲーリヤや、ペーリ

^{*10} やその他この類の美にくらべてなんとみじめで

あろうか。どうして言っていることがあろうか、幻想が求めるものにくらべて現実はつまらぬものであると。しかしこの場合ひとつ見のがされていることがある、これらのゲーリヤ、ペーリ、シルフィードの姿をわれわれは現実の人間のきわめて普通の輪郭をもったものとしての外にはどうしても思いうかべることができないのである、そしてわれわれが自分の想像に対して「人間より美しいなものかを示せ」といくたび繰返しても、——想像はやはり人間を、そして人間のみを示すのである、人間ではなくなにかより美しい生物を想像しているのだと広言してはいるが。あるいはまた、もしなにか現実の中に対比すべきものをもたない自立的なものを創造せんと熱望するならば、全くなにもとも見わけのつかぬあいまいな、あおぎめた、不確定な幻影をあてるのみで力なくたおれるのである。このことに科学は最近に至って気づき、人間は現実においてみうけられるものよりさらに高くさらによきなものをも想像することができないということ、科学においてもまた人間活動の他のすべての領域においても基本的な事実としてみとめたのである。知らないこと、それについて最小の概念をも持たないことは、望むこともまたできないのである。

思いうかべる

「美」なるものは現実由来する。

この重要な事実が承認されるまでは幻想の夢を文字通りの意味に、「言葉通りに」信じて、これらの言葉がなんらかの意味をもつかどうか、なにか確定した形象らしいものを与えるかまたは空虚な言葉にとどまるかを研究しなかったのである。これらの言葉の華麗さを現実に対するこれらの空虚な文句の優越の保証と思ひこみ、あらゆる人間的欲求と志向とをあいまいであらゆる本質的意義をもたないこれらの幻影への志向によって説明したのである。それは言葉のもっとも広い意味における観念論の時代であった。

かくして科学の中へもちこまれた幻影の一つに幻想的な完全さの幻影があった、いわく「人間は絶対的なもののみ満足し、人間は無条件的な完全さを要求する」。チェルヌィシェフスキー氏のもとには若干の箇所にてこのことについてもまた短いちょっとした指摘をみうける。人間には必ず「完全」が必要であるという意見は、——と彼はいう（56頁）——幻想的な意見である、もし「完全」なる言葉を、ありとあらゆる長所を具備し、冷いあるいは飽満した心をもつ人間のひまな幻想がひまにまかせてほじくり出すことのできる、ありとあらゆる欠陥に無縁であるような事物の形態と理解するならば（実際そう理解しているのであるが）。いな、——と彼は他の箇所（66頁）においてつづける——人間の実際生活はわれわれにたやすくさとらしめる、人間の求めているのは単に近似的な完全であって、それは厳密に言えば完全とはよび得ないものである。人間は単

よいもの

「よりよいもの」という意味？

に「よいもの」を求めるのであって「完全なるもの」をではない。完全を要求するのは純粋数学だけであ

る、応用数学でさえ近似計算で満足している。生活のいかなる領域においてにせよ完全を要求することは抽象的な、病的な、あるいはひまな

完全を要求すること

「完全」が達成されたら、その時点ですべては終了する。

幻想の仕事である。われわれはきよい空気を呼吸したいとのぞむ、しかし空気は絶対的に純粋であることはいずこいかなる時にもないことをわれわれ

は気付いているだろうか。空気中にはつねに有毒な炭酸ガスやその他の有害なガスの混入があるではないか。しかしこれらのガスはきわめて少量であるのでわれわれのからだに作用しない、従ってそれらは少しもわれわれのじゃまにならないのである。われわれはきよい水のみみたいとのぞむ。しかし河、小川、泉の水のなかにはつねに鉱物性の混入物がある、——もしそれらが少量ならば（よい水においてはいつもそうなのであるが）

それらは水によってかわきをいやすときのわれわれの享樂を少しも妨げるものでない。かえって完全に純粋な(蒸留された)水は味覚にとって不快でさえある。これらの实例はあまりに物質的であ

完全な水

たとえ話としては無理がある。

ろうか。他の例をひこう。世界におけるすべてのことを必ずしも知っていない人間を無学または無知とよぶ気をおこすものがあるだろうか。いない。われわれはすべてのことを知っているような人間を求めはしない。われわれが学者から彼があらゆる本質的なことを知り、そしてその外に多くの(決してすべてではないが)詳細を知っていることを要求するだけである。われわれはたとえば、すべての問題がことごとくは説明されていて、すべての詳細がことごとくは引用されていて、著者の一つのこらずすべての見解や言葉が絶対的に正しいとはいえないような歴史書に不満であろうか。しからず、書物のなかに主要な諸問題が解決されており、もっとも必要な詳細が引用されており、著者の主要な意見が正しくそして彼の著書にまちがったあるいはまづい説明がきわめて少なければわれわれはその書物に満足である、しかも大いに満足である。要するに人間性の欲求を満足させるのは「相当よいもの」であって、幻想的な完全さを求めるのはひまな幻想のみである。われわれの感覚は、われわれの頭脳と心とは幻想的な完全さについてはなにも知らない、それにまた幻想もそれについて空虚な文句をくり返すのみで、それについての生きた、確定した概念はやはりもっていないのである。

かくて科学は近来、現実の生活のうちに充足を求めつつあり、また見いだす権利を有する人間性の真の欲求と、無為な夢想に終わるところの、また終わるべき仮想的な、想像上の欲求とを厳密に区別する必要に到達した。チェルヌィシエフスキー氏のもとにわれわれは数回この必要についてのあわただしい示唆をみ、また一度は彼はこの思想に若干の展開を与えている。「人工的に発達した人間は(すなわち他の人々の間における

自分の反自然的な地位によってそこなわれた人間は) 虚偽に近いまでに、幻想に近いまでに歪んだ多くの要求をもっていて、これは完全には充足しえないものである、なぜならばそれは本質においてその人間の天性の要求ではなくて、そこなわれた想像力の夢であって、迎合して行こうとつとめる当の人間その人から嘲笑と軽蔑とをうけずしては、この要求に迎合することがほとんど不可能である、なぜならば迎合される人間自身彼の要求はみたまされる価値がないことを本能的に感ずるからである」(105頁)。

実践は思想の真理である

しかしひまなあるいは病的に刺戟された幻想の甘夢としてのこの運命をもつ仮想的な、想像的な志向と、必然的に充足を要求する人間性の現実的な合法的な欲求とを区別することがそれほど重要であるならば、あやまちなくこの識別をなし得べき標識は一体どこにあるか。なん人がこの重要事件における判事となるのであろうか。——判決は人間自身が自分の生活によって下すのである、「実践」、あらゆる理論のまたとないこの試金石は、ここにおいてもわれわれの道しるべたるべきである。われわれはみる、われわれの願望のあるものは喜ばしげに充足をむかえて突進し、現実生活のなかに実現をみるために人間のあらゆる力をはりつめさせる、——これはわれわれの本性の真の願望である。他の願望は反対に現実生活との接触をおそれ、現実生活をさけて抽象的空想の王国におずおずとかくれようとする、——これは仮想的な、にせものの願望であって、それには実行は必要でなく、それは自分の充足をうけないという条件のもとにおいてのみ魅惑的なのである、なぜならば生活の「白日」の下に出ると、それは自分の空虚さを、また実際に人間性の欲求と人間による生活の享樂の諸条件に相応するための不適格を露呈するはずであるから。「実践は思想の真理である」。たとえば人間が自分について、勇敢である、高潔である、真実であると考えまた語っているのが正しいかどうか、実践

において知られる。人間の生活こそ、その人間の性質がどうであるかを解決する。同じく生活が、人間の志向や願望がいかなるものであるかを解決する。あなたはいう、腹がへつたと。よろしい、あなたは食卓について食が進むだろうか。もしもあなたが平凡な料理をこたわって松露をそえた七面鳥を料理してくれるのを待っているならば、あなたの空腹は胃の中ではなく、舌の上にあるばかりなのだ。あなたはいう、学問が好きだと、——これはあなたが学問に従事しているかいないかによって解決される。あなたは思っている、芸術がすきだと。これはあなたがプーシキンをししばしば読むか、あるいは彼の作品はただみせかけのためにあなたの机上に横たわっているかによって、あなたが自分の画廊をししばしば訪れるか、——単に客たちと共に行くだけでなく自分ひとりでも行くか、——あるいはあなたがそれを他人及び自分自身に対して芸術愛好をほこるためにのみ蒐集したのかによって解決される。実践は欺満や自己眩惑の偉大な暴露者である、単に実用的活動においてのみならず、また感覚や思想の問題においても。それにゆえにこそ今日では科学において実践はあらゆる論争点の本質的基準とされている。「理論において論争をうくべきことは、現実生活の実践によってきれいに解決される」。

しかしこれらの諸概念は多くの人にとって不明確なものとしてのこるはずである、もしわれわれがここで「現実」および「実践」という言葉が現代科学においていかなる意味をもっているかに言及しないならば。現実とは死せる自然のみでなく人間の生活をも包含し、現在のみでなく過去をもそれが事実によって表現されているかぎりにおいて包含し、また未来をも、それが現在になって準備されているかぎりにおいて、包含する。ピョートル大帝の事業は現実に属する、ロモノーソフ*11の頌歌は彼の寄木細工の絵に劣らず現実に属する。現実に属しないのはただ、「私は画家になりたい」といってし

*11 ロモノーソフ (1711 - 1763)。ロシアの文学者、科学者。近代ロシア文語の創始者。

かも絵画を研究しない人々「私は詩人になりたい」といってしかも人間や自然を研究しない人々の無為な言葉である。現実に対立するものは思想でない、——なぜならば思想は現実によって生まれ、実現を希求し、それゆえに現実の不可分なる一部を構成するからである——現実に対立するのは無為な空想であって、それは徒然から生まれるものであり、手を組み眼を細めて座っていることを好む人間のたわむれに終わるものである。これと全く同様に「実践的生活」もひとりの人間の物質的活動だけでなく思想的・道徳的活動をもふくむものである。

幻想の夢を信じ、人間はいたるところに絶対なるものを求めるものであって、これを現実生活のなかに求め得ず、現実生活を不満足なものとして却けるのであると語ったところの、現実を幻想の曖昧な甘夢にもとづいて評価したところの、従来の超越的諸体系と、現実を回避する幻想

カント？

の無力を承認し、人間の種々なる願望の人間にとっての本質的価値についての自分の判決において、現実生活と人間活動とが提供するところの指針にもとづくところの新しい見解との相違はいまや明白であり得る。

チェルヌィシェフスキーの美学はヘーゲル美学の継承

チェルヌィシェフスキー氏は科学の現代の方向の正当さを完全にみとめ、一方において従来の形而上学的体系の破綻をみ、他方において支配的美学理論とのその不可分の結びつきをみ、このことから支配的な芸術理論は他の、自然および人間生活に対する科学の新しい見解により相応する理論によって代わられなければならないと結論している。しかしわれわれは新時代の一般的諸見解の美学的諸問題への適用にすぎない彼の諸概念の叙述にかかる前に、科学一般における新しい見解を古い見解に結びつけている関係を説明すべきである。学問的事業の継承者たちが

自分の先行者たち、その労作が彼等自身の労作の出発点となっている先行者たちに反対しているのをわれわれはしばしばみる。こういうふうにはアリストテレスはプラトンを敵視し、こういうふうにはソクラテスはソフィストたちを際限もなくこきおろした、自分が彼等の継承者であったのに。近代においてもこの実例は数多く見いだされるであろう。しかし時としては、新しい体系の創始者たちが自分の意見と自分たちの先行者たちのもとにある思想との関連を明白に理解し、謙虚に自分を彼等の弟子とよんでいる、また自分の先行者たちの諸概念の不充分を暴露しつつ、彼等がこれと同時にこれらの諸概念が彼等自身の思想の発展にいかにも多く寄与したかを明白に示しているという喜ばしい場合もある。かくのごときはスピノーザのデカルトに対する関係であった。現代科学の創始者たちの名譽のためにいわなければならない、彼等は尊敬とほとんど息子としての愛をもって自分の先行者たちをみ、彼等の天才の偉大さと彼等の学説の高貴な性質を完全に承認し、その学説のなかに自分自身の見解の胚種を示していることを。チェルヌィシェフスキー氏はこのことを理解し、彼が美学的諸問題へ適用している思想のもち主たちの例にならっている。彼がその不充分さを証明せんとつとめている美学体系に対する彼の態度は少しも敵対的でない。彼はこの体系の中には彼自身がきずきあげようとしてつとめている理論の胚種が存在していること、彼は従来の理論にも存在している本質的に重要な諸契機を發展させているだけなのであって、これらの諸契機は従来の体系がより一層の重要性を付していたところの、彼には批判に堪えないものとみえるところの他の諸概念と矛盾していたのである。彼は自分の体系と従来の体系との密接な血縁を不断に示そうとつとめている、もっとも両者の間には本質的な差異もあることをかくしていない、このことを彼は若干の個所においてははっきりと述べているが、そのうち一つを引用しよう、「私によって採用される崇高なるものの概念が（と彼は 34 頁にいう）私によって論駁される従来の概念に対する関係は、

私によって提唱される美なるものの定義が、私によって論駁される従来の見解に対する関係に全く等しい、いずれの場合にも従来は部分的かつ二次的な標識とみられていたもの、私が傍系的概念として却ける他の諸概念におおわれて注意の外にあったものが、一般的かつ本質的な原則に昇級させられるのである」。

チェルヌィシェフスキー氏の美学理論を叙述しつつ、評者は純美学的方面における著者の思想の当不当についての終局的判定を下さぬことにする。評者は美学を単に哲学の一部として学んだのみである。ゆえにチェルヌィシェフスキー氏の部分的思想についての判定を、評者には無縁であるところの専門的に美学的な見地から本格的に判断しうる人々に委ねる。しかしながら著者の見解は一般的見解の部分的科学の諸問題への適用としてこそ本質的意義を有するものと評者には思われる、ゆえに評者は考える、この適用が著者によってどの程度まで正しくなされたかを検討するのが、正しく問題の焦点に立つ所以であると。また読者にとっても、評者の意見によれば、一般的見地からのこの批評の方がより興味であろう、なぜならば美学そのものは非専門家にとっては自然および生活に対する一般的見解の一部としての興味を有するにすぎないから。殊によったら若干の読者にはこの論文全体があまりに抽象的にみえるかも知れない、しかし評者は外面だけで判断しないように読者に乞うものである。抽象性には種々のものがある。時としてそれはひからびて不毛なことがある、時としてはこれと反対に、抽象的形式のなかに叙述された思想に注意を向けさえすればそれらの思想はたちまち多くの生きた適用をうるのである。そして評者は、評者によって上に述べられた諸思想が後者の種類に属することを断然確信するものである、——このことを評者はまっすぐにいう、なぜならばその諸思想は科学に属するものであって特に評者に属するものではないのであって、評者はこれをまなびとったにすぎな

い、従って評者は、一定の学派の追隨者が彼の採用した体系を賞讃しうるのと同じく、この問題に自分の個人的自尊心を混入することなしに、これらの諸思想を絶讃することができるのである。

しかしチェルヌィシエフスキー氏の理論を叙述するに当たってわれわれは著者が従った順序を変更しなければならないであろう。著者は彼の論駁する美学教程の例にならって、まず美なるものの理念を、ついで崇高なるものおよび悲劇的なるものの理念を検討し、ついで現実に対する芸術の関係を研究し、そののち芸術の本質的内容について、そして最後に芸術がそこから発生するところの欲求について、いいかえれば芸術家が自分の作品によって実現する諸目的について語っている。支配的な美学理論においてはこのような順序は全く自然である、なぜならば美なるものの本質についての概念は全理論の基礎的概念であるから。チェルヌィシエフスキー氏の理論においては異なる。彼の理論における基礎的概念は現実に対する芸術の関係である、それゆえに著者はこれからはじめるべきであった。他人のところに採用されており、彼の体系には無縁であるところの順序に従うことによって著者は、われわれの意見によれば、重要な誤謬をなしたのであって、自分の叙述の理論的均斉をくずしたのである。彼は最初に芸術の内容を、彼の意見によれば、構成するところの多数の要素のうちの若干の部分的要素について語り、ついで現実に対する芸術の関係について、そしてそののちふたたび芸術一般の内容について、ついで現実に対する芸術の関係から帰結するところの、芸術の本質的意義について語らねばならなかった、——かくして同質の諸問題が、その解決には無関係な他の諸問題によって寸断されている。われわれはあえてこの誤謬を訂正し、著者の思想を体系的均斉の諸要求にもっと相応する順序に叙述しよう。

支配的な理論は、絶対的なものを人間の願望の目的におきま、現実のなかに自分の充足を見いださない人間の願望を、現実世界の事物や現象によって満足させられるつましい願望より上位において、この一般の見解——支配的な理論においてはこれによって人間のあらゆる思想的道徳的活動の起源が説明されているのである——をその理論が「美なるもの」をその内容とみなしているところの芸術の起源にも適用する。人間によって現実のなかにみうけられる美なるものは、その美しさを破壊するところの重要な諸欠陥を有する、と支配的理論はいう。しかしわれわれの美的感覚は完全を求める、それゆえに現実に満足しない美的感覚の要求の満足のためにわれわれの幻想は、自然および生活における美なるものの美をゆがめるところの欠陥をもっていないような新たなる美なるものの創造へと刺戟される。創造的幻想のこれらの創造物は芸術作品によって実現される、芸術作品こそ現実の美を害す諸欠陥からまぬかれているものである、ゆえに本来、芸術作品のみが真に美しいのであって、自然や現実生活の諸現象のごときは単に美の幻影を有するにすぎないのである。かくて芸術によって創造される美なるものは、現実のなかで美しく見える（単に見えるだけ）ところのものよりはるかに高いのである。

この命題は現実によって提供される美なるものに対する手きびしい批判によって裏付けられており、この批評は美なるもののうちにその美をゆがめる多くの欠陥を見いだそうとつとめるのである。

チェルヌィシェフスキー氏は、現実を幻想の夢よりも高くみる新しい現実観の信奉者として、幻想によって創造される美なるものがその美において現実の諸現象よりも高いとする意見に同意することはできない。この場合彼は、われわれの見解によれば、自分の基本的信条をこの問題に全

く正しく適用しており、この信条に同意するものをすべて味方としてもち、幻想は現実より高く聳立しようという従来の意見を持するもののすべてを反対者としてもつであろう。評者は、読者がもちろん気づかれたように、一般的科学的信条においてチェルヌィシェフスキー氏に全く賛成するものであって、**現実**は**芸術**によって**実現される幻想の創造物**よりその**美において高い**という彼の部分的結論の正当さをまた承認しなければならない。

ヘーゲル美学の批判

しかしこのことを証明しなければならない、——そしてチェルヌィシェフスキー氏はこの責務の遂行のためにまず、生きた現実の美なるものに対してなされている非難を検討し、支配的理論がこの美なるものに対してとがめ立てている諸欠陥は必ずしもそのなかに存しないこと、また実際あるにしても決してこの理論が考えているように美をゆがめるほどの著大さにおいてではないことを証明しようとしてつとめる。ついで彼は芸術作品がこれらの諸欠陥をまぬかれているかどうか検討して、生きた現実に対してなされているあらゆる非難はすべて、芸術の創造物にもあてはまるものであること、そしてこれらすべての欠陥は、生きた現実によってわれわれに与えられる美なるものにおけるよりも、芸術の創造物においてもっとあらわであり強いのであることを証明しようとしてつとめる。芸術一般の批判から彼は個々の芸術の批判にうつり、いかなる芸術も、彫塑も、絵画も、音楽も、詩も、現実においてそれに相応する美なる現象の見あたらぬほどの美なるなものかを提供するような作品をわれわれに与えることができないこと、またいかなる芸術も、これに相応する現実の現象と美において同等な作品を創造し得ないことをまた証明している。

かくして著者は、問題の決定が依存するところの各級法廷の一つをも

忘れていないとわれわれには思われる。そしてもし彼の批判が正当ならば、彼はこういう権利を有したのである、「私の検討は示した、芸術作品はわずか2、3の取るに足らぬ点においてのみ現実に対して優越をもち(その上これらの場合においても優越ははなはだ疑わしいものである——とわれわれは付言する)、その本質的な(あらゆる本質的な——とわれわれは付言する)質においては必然的に現実よりもはるかに下位にとどまることを」と。どの程度まで著者の批判が正当であるかわれわれは決定し得ない、なぜならばわれわれは前述したごとく、著者と同一の学派に属するものであって、著者と同一の原理の信奉によって著者に同意する下地のできていない人々にこの決定をゆだねなければならない、著者はこの原理から結論をひき出しているにすぎない、そして一般的にかなり論理的にひき出している。しかし共鳴はなれ合いではない、そしてわれわれは指摘しなければならない、著者が現実における美なるものに対してなされている非難をフィッシャーが叙述した形においてのみ叙述し論駁している、これにヘーゲルが述べた非難をつけくわえなかったことによって著者がふたたび大きな見おとしをなしていることを。なるほどフィッシャーにおいて生きた現実の美なるものの批判は、ヘーゲルにおけるよりもっとはるかに完全であり詳細である、しかしヘーゲルのもとにわれわれは、そのあらゆる短さにかかわらず、フィッシャーによって忘れられており、しかもきわめて深刻な二つの非難、——自然におけるあらゆる美なるものの Ungeistigkeit および Unfreiheit (無精神性、無意識性あるいは無意味および不自由)をみうける。しかし付言しなければならない、叙述におけるこの不完全は著者のおちどではあるが、著者によって擁護されている見解の本質をきずつけるものではない、なぜならば著者によって忘れられたこれらの非難も、われわれがチェルヌィシエフスキー氏のもとに無意図性の非難の項で見いだすと同一と方法によりまたほとんど同一の事実によって、現実における美なるものから容易にとりのぞかれ芸術におけ

る美なるものに転嫁されるからである。もう一つの見おとしもこれに劣らず重要である、個々の芸術の検討に当たって著者は無言劇、舞踊、舞台芸術を忘れた、——著者はこれらを検討すべきであった、たとえ他の美学者たちと同じくこれを造形芸術（die Bildnerkunst）の一部門とみなしているにしても、なぜならばこれらの芸術の創造物はその性質において彫塑像とは全く異なるものであるから。しかしこの誤謬は——われわれはまた付言する、単に著者のおちどとさるべきものであって、著者によって擁護される問題の本質を少しもきずつけるものではない。なぜならば舞踊と舞台芸術とについては、音楽についての項で著者のもとに見いだされると同一のことがほとんど同一の言葉でくり返されるべきであるから。

「芸術至上主義」という概念

しかしもし芸術作品が現実よりはるかに低いとすれば、自然と生活との諸現象にたいする芸術の高い優越なる意見はいかなる根拠からおこったのか。著者はこの根拠を、事物は人間によって単にその内的価値のみならず、さらに稀少さとその入手の困難さに応じて評価されることに求める。自然と生活とにお

入手の困難さ

「無いもの」ねだり？

る美なるものはわれわれの側における特別な配慮なくしてあらわれ、しかもそれはきわめて多い。美しい芸術作品はきわめて少く、またそれは、労力なくしては、時としてはきわめて骨の折れる労力なくしては、生み出されない。その上人間はそれらを、自分と同じ人間の仕事として誇るのである、——フランス人にとってフランスの詩（本質においてはなはだみじめな）が世界で最良のものに見えるように、人間にとって芸術一般は特別な愛をもちうる、それが人間の仕事であるがゆえに、自分のもの、身近なものにたいする偏愛がそのために弁護するがゆえに。さらにまた芸術は芸術家とともに自然と生活とが注意を払わないところの人間の抹消的な気まぐれに服従する、そしてこのことによって卑俗化し、自分をゆがめ、

あらゆる阿諛者と同様に、きわめて多くの人々の愛をかちうる。最後にわれわれは芸術作品を、われわれが欲するときに、すなわちそれらの美を鑑賞し、それらを楽しむ気分をもつときに、楽しむ、ところが自然と生活との美しい現象は、われわれの注意と同情とが他の事物に向けられているようなときに、われわれの傍を通過する場合がきわめて多い。この外に著者は芸術の価値についてのあまりに高い意見の根拠をさらにいくらか列挙している。これらの説明はかなり正当なものとわれわれには思われる、しかしそれは全く充分というわけにはいかない、——著者はまた忘れている、現実にはたいする芸術の優越なる意見は学者の意見、哲学上の流派の意見であって、体系的信条に無縁である人間一般の判断ではない、というきわめて重要な事情を。なるほど多くの人々は芸術をきわめて高く評価し、内的価値そのものが芸術に高く評価される権利をあたえるよりももっと高く評価しているかも知れない、そしてこの偏重は著者の指示するところによって充分説明される。しかしまた多くの人々は芸術を現実より高く評価せず、この両者の価値を比較しようとは考えもせず、もし明白な答を必要とする場合には、自然と生活とは芸術より美しいというであろう。美学者だけ、それもまた必ずしもすべての学派のものではない、が芸術を現実の上位におくのであって、彼らにのみ属する特別な見解の結果として構成されたかような意見はこれらの見解によって説明されなければならないのである。すなわち偽古典主義派の美学者たちが現実よりも芸術を尊重したのであって、それは一般に自分の時代と集団との病、——あらゆる習慣と考え方的人工性——をわずらっていたからである。彼等は単に芸術のみでなく生活のあらゆる領域においてあるがままの自然をおそれかつ回避し、粉飾された、「洗練された」自然を愛したのである。しかし今日支配的な学派の美学者たちは芸術をなにか観念的なものとして、現実的であるところの自然および生活より上位におくのである、なぜならば彼等は現実主義（リアリズム）への天才的な志向にもかかわらず

まだ観念論よりのがれ得ず、観念的生活を一般に現実的生活より高しとしているからである。

では、芸術の目的と意義は？

チェルヌィシエフスキー氏の理論にかえろう。もし芸術がその作品の美において現実と比肩し得ないならば、芸術がその発生を現実の美に対するわれわれの不満およびなにかよりよいものを創造しようとする志向に負うことはあり得ない、——もしそうだとすれば人間は芸術を、なにか決して自分の目的を達し得ぬ無益なものとしてとくに放棄してしまっただけである、——と彼はいう。したがって芸術をよびおこすところの欲求は、支配的な理念が考えているところとは別のものでなければならない。これまでのところチェルヌィシエフスキー氏と人間生活および自然についての基本的諸概念を同じくするすべての人々は、われわれと同様に彼の結論が一貫しておりまた首肯させるものであるというであろう。しかしわれわれは彼によってさがし求められた、芸術を生むところの欲求が完全に正しいものであるかどうか決しようとは思わない。彼の当不当を判断する完全な可能性を読者に与えるために、彼自身の言葉をもってこの結論を述べよう。

芸術の意義

芸術が現実の不備や現状への不満を充足するものであるなら、よりよいものを創造しようとする志向など必要なくなる。(芸術さえあればそれでよい)

芸術は現実を再現する

「海は美しい、海をみるときわれわれは美的関係において海に不満だとは思わない。しかしすべての人々が海辺に住んでいるわけではない。多くのものは生涯に一度も海をみるできない、しかも彼等は海をながめたい——、そして彼等のために海を描いた絵があらわれる。もちろん海そのものをみる方がその描写をみるよりずっとよい。しかしよりよいものの欠除のために人間はよりわるいもので満足し、品物の欠除のため

に代用品で満足する。また現実の海をながめることができる人々も、欲するときいつでも海をみられるというわけではない、——彼等は海について回想する。しかし想像力は弱く、それは支持を、回想のよすがを必要とする、——そして海についての自分の回想を生き生きさせるために、自分の想像のなかに海をより明白にうかび出させるために、彼等は海を描いた絵を見るのである。これがきわめて多くの（大部分の）芸術作品の唯一の目的と意義である、すなわち現実における美なるものを実際に楽しむ可能をもたなかった人々に、それをたとえ幾分なりとも知る可能をあたえること、経験において現実における美なるものを知りそれを回想することを好む人々にあっては回想のよすがとなり、それについての回想をよびおこし活気づけること。（「美なるものは芸術の本質的内容である」という表現はいまのところそのままにしておく。のちにいたってわれわれは「美なるもの」という術語の代わりに、他の、われわれの意見では芸術の内容をより正確により完全に定義づける術語をもってするであろう）。かくて芸術の例外なくすべての作品に属する芸術の第一の意義は自然と生活との再現である。芸術作品がこれに相応する現実の諸方面および諸現象にたいする関係は版画とその原画との関係、肖像のそれがあらわす

版画

ここでは「印刷」のような意味。

顔にたいする関係とまったくひとしい。版画が絵から写されるのは絵がまずいからではなく、絵が非常にすぐれていればこそである。同様に現実が芸術によって再現されるのはその欠陥の払拭のためでなく、現実それ自身が十分に美しくないからではなく、現実が美しいからこそである。版画は原画にまさるものたらんとするものではない、——それは芸術的方面において原画よりはるかにおとる。同様に芸術作品もまた現実のもつ美しさまたは偉大さに決して達し得ない。しかし絵は一つである、それをながめることができるのは、その絵がかざられている美術館へ行った人々だけである。版画は数百の複製において全世界にひろまり各人がその好むときに、自分の室から出

ずに、自分の長椅子から立たずに、自分の部屋着をぬがずにながめることができる。同様に現実における美なる事物もまたなんびとにもかついかなる時にも手がとどくというわけにはいかない、芸術によって再現されて(拙く、粗雑に、色あせて、——これは事実である、しかしとにかく再現されて)それはなんびとにもかついかなる時にも手のとどくものとなる。肖像はわれわれにとって貴重でなつかしい人間から写される、彼の顔の欠点(これらの欠点がわれわれになんの関係があるか。それらはわれわれにとって目につかないかあるいはなつかしいものである)を払拭するためでなく、その顔が実際はわれわれの眼前にないときでさえ、それをながめる可能をわれわれにあたえるために。かくのごときが芸術作品一般の目的と意義である、それは現実を修正したり、それを装飾したりするのではなく、**現実を再現し、現実の代用品として役立つものである**」。

著者は彼によって提唱される再現の理論がなにか新しいものでないことをみとめている、このような芸術観はギリシヤ世界に支配的であったのである。しかしそれと同時に著者は彼の理論は偽古典主義の**自然模倣論**とは本質的に異なるものであると断定し(われわれの意見では、これは正しい)、ヘーゲルの美学から**偽古典主義**的諸概念の批判を引用してこの相違を証明している、すなわち自然模倣論に関しては完全に正当なヘーゲルの駁論のただひとつたりとも再現論には適用されない、従ってこの二つの見解は、あきらかに、本質的に異なるというのである。実際に再現は想像を助けることを目的とし、模倣がなさんとするごとく感覚を欺かんとするものでなく、また模倣のごとく空虚ななぐさみではなくて、現実的意義を有する仕事である。

偽古典主義＝新古典主義
古代ギリシヤ・ローマへの回
帰をめざす運動

再現論はもし注目をかちうるとすれば、創造論の信奉者の側からの強い攻撃をよびおこすことはうたがない。再現論は、あれほどしばしば

謄写

書き写すこと。

攻撃されている現実の銀板写真的謄写にみちびくものであるということであろう。盲従的謄写なる

考えを予想してチェルヌィシエフスキー氏は示している、人間は芸術においても事物を正確である以上のことをのぞまずに謄写しようとする場合でさえ、自分の道徳的思想的な力を、想像力をもふくめて一切利用する自分の——権利とはいわない、それでは不充分である——義務を放棄することはできないことを。「銀板写真的謄写」に反対するかわりに、——と彼は付言する。——謄写もまた、他のあらゆる人間の仕事と同じく、理解を要求する、本質的特徴を重要でない特徴から区別する能力を要求する、とだけいう方がよりよいではないか。「死んだ謄写」と通常いつている、しかし人間は彼の手の機構が生きた理性によって動かされなければ正確に謄写することもできないのである、謄写される文字の意味を理解

fac simile(ファクシミリ)

ラテン語。複写すること。

しないでは正確な fac simile さえつくることはできない。

しかし「芸術は自然と生活との諸現象の再現である」という言葉によって定義されるのは、芸術作品が創造されるところの方法だけである。いかなる現象が芸術によって再現されるかという問題がのこる。芸術の形式的原則を定義した上、概念の完全さのために芸術の現実的原則あるいは内容をも定義することが必要である。通常いわれている、芸術の内容として役立つものは美なるものおよび並立してこれに従属する二概念——崇高なるものと喜劇的なるもの——とだけであると。著者はかような概念は

あまりに狭隘なもののみでおり、芸術の領域は生活および自然において人間にとって興味あるすべてのものであると断定している。この命題の証明はあまり展開されていず、われわれの意見ではチエルヌィシエフスキー氏の叙述のうちでもっとも不十分な部分をなしているが、彼はこの点をあまりに明白で証明をほとんど必要としないものとみていたようである。われわれは著者によって採用されている結論そのものを論駁するものでなく、彼の叙述に不満なだけである。彼は「芸術の内容は美なるもの、崇高なるものおよび喜劇的なもののせまい枠によってかぎられるものでない」との彼の思想を裏書きすべき実例をもっとはるかに多く引用すべきであった、——この正当な考えを証明する何千の事実を見いだすことは容易であった、そしてそれだけにこのことに配慮しなかった著者の罪は大きい。

芸術は現実を説明する

しかしきわめて多くの芸術作品がただ一つの意義——人間にとって興味ある生活の諸現象の再現——をもつとしても、またきわめて多くの芸術作品はこの基本的な意義の外に、他のより高い意義を獲得する、再現される諸現象の説明として役立つという。このことは特に詩についていうべきである、詩はあらゆる細部を包容することはできないので、従って必然的に自分の絵画からきわめて多くの些事を逸するのであるが、まさにそのことによってわれわれの注意を残された少数の特徴に集中させる、——もし、当然そうあるべきことながら、本質的な特徴が残されるならば、このことによって無経験な眼にとっての事物の本質の概観を容易ならしめる。この点にある人々は現実に対する詩的絵画の優越をみる、しかしあらゆる非本質的な細部の省略と主要特徴のみの伝達は詩の特別な質ではなく、合理的な言語の一般的な特徴である。散文的な物語においても同じことは起こるのである、同じことは書物の目次も書物の本文について行うところである——もちろん目次によって書物の内容を一覧する方

がその本文を全部一気に読むよりも容易である、しかしこのことからしてプーシキンの詩の目次は詩そのものよりよいということになるであろうか。

芸術は現実に判決を下す

最後にまた、もし芸術家が思惟する人間であるならば、彼は再現される諸現象について自分の判断をもたないわけにはいかない、この判断は好むと好まざると、あらわなるとひそかなると、意識的となると無意識的になるとにかかわらず作品に反映し、作品はかくしてさらに第三の意義——再現される現象についての思想の判決——をもつ。この意義をわれわれは詩において、他の芸術におけるよりもしばしば見いだす。

まとめ

述べられたところすべてをまとめて、——チェルヌィシエフスキー氏は結論する、——われわれは芸術にたいする次の見解をうる、芸術の本質的意義は生活において人間にとって興味あるすべてのものの再現である、きわめてしばしば、特に詩において、生活の説明、その諸現象についての判決がまた前面に出てくる。現実に対して芸術は、歴史が有すると全くひどい関係に立つ。内容における相違はただ、歴史は社会の生活について語るが芸術は個人の生活について語り、歴史は人類の生活について語るが芸術は人間の生活について語る点だけである（自然の絵画は人間生活の諸現象のための環境の意義、あるいはこれらの諸現象についての暗示、予感の意義をもつのみである）。形式における相違についていえば著者はこれをこう定義している、歴史はあらゆる科学と同じく、自分の絵画の明瞭さ、わかりやすさについてのみ意を用いるが、芸術は細部の生命的完全さに意を用いる。歴史の第一の任務は過去をつたえることである。歴史の第二の任務、必ずしもすべての歴史家によって果たされていない任務は、過去を説明すること、過去について判決を下すことである。

第二の任務に意を用いないとき歴史家は単なる年代記作者たるにとどまり、そして彼の著作は真の歴史家のための材料であるかあるいは好奇心の満足のための読みものである。第二の任務を果たすとき歴史家は思想家となり、彼の創造物は科学的価値をうる。全く同じことを芸術についていうことができる。生活の諸現象の再現にのみとどまるとき芸術家はわれわれの好奇心を満足させるかあるいは生活についてのわれわれの回想に助けをあたえるかである。しかし彼がその上再現される諸現象を説明し裁判するとき彼は思想家となり、そして彼の作品はその芸術的価値の上により高い意義——科学的意義を兼備する。

芸術は現実の上位に立ち得ないのみでなく、その作品の美学的価値において現実と比肩することもできないという思想は、現代の世界の一般的諸原則のこの問題への単なる適用によってみちびきだされるものであって、著者はこの思想が批判に堪えうるものであると自らいう権利ありと考えた。しかしそのさきの、芸術は自然の再現であり、芸術の内容は人間にとって興味ある生活の諸現象であるというチェルヌィシエフスキーの個別的諸概念は、現実に対する芸術の関係について一般的概念と調和しており、それとかなり緊密な依存関係にあるとさえいえ、しかしこれらの諸概念によるよりはむしろ芸術によって提供される諸事実の分析によって完全に決定されるものである。ゆえに評者はこれらの個別的な思想を著者自身の責任にゆだねる、そしてもし評者が、これらの諸概念もまた本質において妥当なものと思われると付言することを自ら許すとすれば、これは評者の意見であって、科学の終局的判決ではない。しかしながら公平はこう述べることを要求する、著者の理論を裏付ける諸事実は彼の分析のなかにかなり多く引用されていると。

芸術の内容の一般的定義から、この内容の構成に含まれている個別的諸要素への移行は自然である、でわれわれはここで美なるものおよび

崇高なるものに対する著者の見解を叙述しよう、これらのものの本質の定義において著者は支配的な理論に賛成していない、なぜならばこの理論はこれらの場合において科学の現在の発展に相応しなくなったからである。彼がこれらの諸概念を分析しなければならなかったのは、これらの通常の定義のなかに現実に対する芸術の優越なる思想の直接の源泉が存在しているからである。これらの諸概念は支配的な理論において一般的な観念論的諸原則と個別的な美学的思想との間の連結として役立つのである。著者はこれらの概念を自分の理論の精神と調和させるために超越論的混合物から清掃しなければならなかったのである。

「美」とはかくあるべしとする生活

支配的理論は美なるものについての自分の概念の表現のための二つの公式をもっている、「美なるものとは理念と形象との統一である」および「美なるものは個々の事物のなかでの理念の完全な具現である」。著者は見いだしている、後の公式は美なるものの理念ではなく芸術あるいは一般にあらゆる人間活動の傑作とよばれるものの本質的標識について語っているのであり、また前の公式はあまりに広すぎることを。それは、美なるものとは自分の類のうちでもっともすぐれたものであると語っているのである。しかし美に到達しない事物の多くの種類が存在するのである。ゆえに著者は支配的表現の双方とも完全に満足すべきものでないこととみとめ、より正確な定義を求めることを余儀なくされるが、それを著者は、彼の思うところでは、つぎの公式のなかに見いだす、「美なるものは生活である、われわれがそのなかで、われわれの諸概念においてかくあるべしとする生活をみるところの存在が美しいのである。自分のうちに生活を示し、あるいはわれわれに生活のことを想起させるところの事物が美しいのである」。この結論がよって立つところの分析の本質的な部分——人民の種々なる階級がそれを理解するところの、人間美の属性の検

討——をここに紹介しよう。「よい生活、かくあるべき生活とは、ただの人民にあっては、腹一ぱいに食い、よい小屋に住み、十分に眠ることに存する、しかしこれと同時に農民にあっては「生活」の概念のなかにつねに労働についての概念がふくまれている、労働なしで生活することは不可能であり、それにまた退屈に違いない。大きな、しかし極端な疲労には至らぬほどの労働を伴うみち足りた生活の結果は、村の少女にあってはきわめて新鮮な顔色と頬一ぱいの紅色であろう、——人民の概念における美の第一要件であるところの。多く労働し、それゆえに体格のがっしりしている村の少女は十分な食物をとっている場合にはかなりかたぶとりである、——これまた村の美人の必要条件であって、上流の、「なかば空気のような」美人は農民には全く「みっともないものに」見え、彼に不快な印象さえあたえる、なぜならば彼は「瘦身」を病弱または悲しい身の上の結果とみなすことになれているからである。しかし労働は脂肪ぶとりを許さない。もし村の少女が肥っていると、それは病弱の一種で、「ぶくぶくした」体格のしるしであって、人民は大きな肥満を欠点とみている。村の美人には小さな手や足はあり得ない、彼女は多く労働するからである、——美のこのような属性についてはわが国の歌謡のなかには言及されていない。要するに民謡のなかの美人の記述には、花咲く健康と肉体の力の均衡との表現でないもの、不断のそしてなぐさみごとでない、しかし度をすぎない労働を伴うみち足りた生活の常習の結果の表現にあらざる美の標識は一つとして見出されない。上流の美人はまったくおもむきを異にする。すでに数世紀のあいだ彼女の祖先は手で労働することなしにくらしてきた。なにもしない生活にあって血液は手足にあまりながれない。世代が新しくなるごとに手足の筋肉は弱まってゆき骨はより細くなる。これらすべてのことの必然的結果は小さな手と足とならざるをえない。それは、社会の上流諸階級にとってそれのみが生活と見える生活の、肉体的労働のない生活のしるしである。もし上流の女性が大きな手と足をもつ

ていれば、それは、あるいは彼女のからだつきがわるいことのあるしである。あるいは彼女が古きよき家がらのうまれでないことのあるしである。同じくこの理由によって上流の美人は小さな耳をもっていなければならない。偏頭痛は周知のごとく興味ある病気である——そしてそれは理由のないことではない。無活動のために血液はすべて中心部の諸器官にとどまり、脳髄に流入する。神経系統はそれだけでなくさへ身体の全体的衰弱のために亢奮しやすい。これらすべての必然的結果は継続的な頭痛と神経のいろいろな変調である。どうしようがらうか、病気も、それがわれわれに好ましい生活の結果であるときには興味があるのであり、羨ましいほどさえある。なるほど健康が人間の眼中において自分の価値を失うことは決してありえない、なぜならばみち足りていてもぜいたくをしていても健康のない生活はつまらないからである。したがって頬の紅味と健康に花咲く新鮮さは上流の人々にとっても依然として魅力あるものである。しかし病身、弱々しさ、不活発、ものうさもまた豪奢で無為な生活の結果とみられるかぎりこれらの人々の眼中において美の価値をもつのである。蒼白さ、ものうさ、病身は上流の人々にとってもうひとつの意義をもっている。もし農民が休息を、安静をもとめているとすれば、物質的な不足と肉体的な疲労はないが、そのかわり無為と物質的顧慮の欠如のためにはしばしば退屈を感じる教養ある社会の人々は「強い感覚、興奮、激情」をもとめ、それなしでは単調無色な上流社会の生活にそれによって色彩、多様性、魅惑をそえるのである。そして強い感覚のために、燃えるような激情のために人間は急速に消耗してゆく。美人のものうさ、蒼白さが、彼女が「十分に生活を知った」しるしであるとすればどうしてそれに魅惑されずにいられよう。

若い日のしるし

いきいきした色のみずみずしさは美しい、

しかし憂愁の徴候、蒼白い色は
さらに美しい。

出典不明

しかし蒼白い、病的な美への熱中が趣味の人為的な墮落のしるしであるにしても、あらゆる真に教養ある人間は、真の生活は頭脳と心との生活であることを感ずる。かかる生活は顔の表情のなかに、特に眼のなかにもっとも明白に刻印される。それゆえに民謡のなかにはあれほどわずしかし語られていない顔の表情が、教養ある人々のあいだに支配的な美の概念のなかでは、絶大な意義をうる。そして人間が美しい表情にとむ眼をもつがゆえにのみ、われわれに美しく見えることがしばしばある……。このことの**反対面**を見よう、いかなる場合に人間は**美しくないか**を検討しよう。人間の一般的容姿の美しくないことの原因は、わるい姿をもつ人間が、「体格がわるい」ことのうちにあると、なにびとでも指摘するであろう。不具は病気の、あるいは破滅的な事件の結果であって、それらの原因によって人間は特にその発達の初期において不具になりやすいものである。もし生活とその発現が美であるならば、病気とその発現が醜であることはなほだ自然である。しかし体格のわるい人間もやはり不具なので、ただ程度がひどいだけであり、「わるい体格」の原因も不具を生ぜしめるそれと同様で、それより弱いだけである。せむしは人間の発達がその中で行われたところの不幸な事情の結果である。しかしねこぜもまたせむしと同じもので、ただ度があさいだけであって、同じ原因からおこるにちがない。一般に体格のわるい人間はある程度までゆがめられた人間である。その姿はわれわれに生活についてではなく、幸福な発達についてではなく、発達のつらい方面について、不順な事情について語っているのである。容姿の一般的な概観から顔にうつろう。顔の輪郭はそれ自身としてみにくいこともあり、その表情においてみにくいこともある。顔にお

いてわれわれに気に入らないのは「にくにくしい」「不快な」表情であるが、それは憎悪がわれわれの生活をそこなう毒だからである。しかし顔がその表情によってではなくそれ自身としてみにくい場合の方がずっと多い。顔の輪郭がみにくいのは顔の骨の組織がわるい場合、軟骨や筋肉がその発達において多かれ少なかれ不具の刻印をもつ場合、つまり人間の初期の発達が不順な事情のなかにおこなわれた場合である」。

支配的な理論は、自然界における美がわれわれに人間および人間の美を想起させるものであることをみとめている、ゆえに人間における美が生活であるならば、自然の美についても同じことをいうべきことは明白である。チェルヌィシェフスキー氏が美なるものの本質的意義についての自分の概念の裏付けとしている分析を、われわれは非難しよう、著者によって用いられている表現は、美と生活との関連を人間は本能的にみとめるものであるか意識的にかについての不審をまねくおそれがあると。大部分の場合これが本能的であることは自明である。著者がこの重要な事情を指摘することを怠ったのは手おちである。

美なるものにたいする、著者においてとりあげられている見解としりぞけられている見解との相違ははなはだ重要である。もし美なるものが「個々の存在における理念の完全な表現」であるならば、美なるものは現実の事物のなかにはない、なぜならば理念なるものは全体的な世界構成によってのみ完全に発現されるものであって、個々の事物のなかには完全には実現され得ないからである。そのことからして、美なるものはわれわれの幻想によってのみ現実のなかにもちこまれるものであることになり、それゆえに美なるものの真の領域は幻想の領域であり、またそれゆえに、

幻想の理想を実現するところの芸術は、現実の上位に立つものであり、人間が現実のなかに見いださないところの美なるものを創造しようとする彼の志向をその源泉とするということになるであろう。反対に、著者によって提唱される「美なるものとは生活である」という概念からは、真の美は現実の美であるということになり、芸術は（著者が実際そう考えているように）現実の世界の諸現象と美において対等なものをも創造し得ないということになり、そうすれば芸術の起源はわれわれがさきに述べたところの著者の理論によって容易に説明される。

支配的な理論において崇高なるものの概念の定義に用いられている二つの表現、——「崇高なるものとは形式に対する理念の優越である」および「崇高なるものとはわれわれの心に無限なるものの理念をよびおこすところのものである」を批判に付しつつ、著者はこれらの表現もまた正しくないとの結論に達する、——著者は、事物が無限なるものの理念を少しもよびおこすことなくして崇高なるものの印象を起こさせることを見いだす。ゆえに著者はまたもや他の定義をもとめなければならないのであって、崇高なるものの領域に属するあらゆる現象は次の公式によって包括され説明されると彼には思われる、「崇高なるものとは、われわれがそれと比較するすべてのものよりはるかに大なるものである」。かくてたとえば、——と著者はいう——カズベークは壮大な山である（なにか無際限あるいは無限なるものとは少しも見えないけれども）、なぜならばわれわれが見なれている丘陵よりはるかに高いからである。かくてヴォルガは壮大なる河である、なぜならば小さな諸河川よりはるかに幅ひろいからである。愛は崇高なる情熱である、なぜならば日々の小さな打算や陰謀よりはるかに強いからである。ジュリアス・シーザー、オセロ、デスデモナは崇高なる人物である、なぜならばジュリアス・シーザーは普通の人々よりはるか

に天才的であり、オセロは愛しかつ嫉妬することが、デズデモナは愛することが、普通の人々よりはるかに強いからである。

チェルヌィシエフスキー氏によって論駁されている支配的な定義によれば、厳密な意味における美なるものおよび崇高なるものは現実のなかには見うけられず、われわれの幻想によって現実のなかにもちこまれるだけであるということになる。チェルヌィシエフスキー氏によって提唱されている諸概念によればこれと反対に、美なるものおよび崇高なるものは自然および人間生活のなかに現実的に存在するということになる。しかしこれと同時にこれらの質を自分のうちにもつならかの事物の鑑賞は、鑑賞する人間の諸概念に直接に結びついている。生活についてのわれわれの諸概念と一致する生活をわれわれがそのなかに見るところのものが美しいのであり、われわれがそれと比較する諸事物よりはるかに大なるところのものが崇高なのである。かくて現実における美なるものと崇高なるものとの客観的存在は人間の主観的見解と調和させられるのである。

崇高なるもののもっとも重要な部門をなすところの悲劇的なものの概念に、著者は新しい定義をやはり与えなければならなかった、いまでは科学によってその内的空虚が証明されているところの運命の概念とこの概念とを結びつけているところの支配的な美学体系のなかで、この概念にまつわっている超越的混合物からこの概念を純化するために。科学の要求に従って悲劇的なものの定義から運命あるいは必然についてのあらゆる思想を除去することによって、不可避免的に著者は悲劇的なものを単に「人間の生活におけるおそろしきもの」と解している。喜劇的なものの概念（内容を失った形式の、あるいは形式の卑小に不相応な内容

を装わんとする形式の空虚さ、無意味)は支配的な理論によっても現代科学の性格に相応するように展開されている、ゆえに著者はこの概念を変更する必要をもたない、——それは通常の表現においても著者の理論の精神と完全に調和するのである。かくして著者が自ら課した任務——主要な美学的諸概念を科学の現代の発達に相応させること——は著者の力の及ぶ限りにおいて、なしとげられた、そして著者は自分の研究をこう結んでいる、

「幻想と比較しての現実の弁護、芸術作品は決して生きた現実との比較に堪え得ないことを証明しようとする志向、これこそ私の論文の本質である。しかし著者の論ずるごとくに芸術を論ずることは芸術を卑下することを意味しないであろうか。然り、芸術がその作品の芸術的完全さにおいて現実生活より低いことを証明することが、芸術を卑下することを意味するならば。しかし熱狂的讃辞を反駁することはいまだ誹謗者たることを意味しない。科学は現実より高きものたらんとは思わない、このことは科学にとって恥ではない。芸術もまた現実より高きものたらんと思つてはならない、このことは芸術にとって屈辱的ではない。科学は語ることを恥じない、科学の目的は現実を理解し説明することであり、ついで自分の説明を人間の幸福に適用することであると。同じく芸術をして承認することを恥じざらしめよ、芸術の目的は、現実によって与えられるより完全なる美的享樂の欠如の場合に人間に代償を与えるために、この貴重な現実を力の及ぶかぎり再現することであり、人間の幸福のためにこの現実を説明することであると」。

この結論は、われわれの意見によれば、不十分にしか展開されていな

い。それは、芸術作品の無条件的価値に対する法外な讃辞がしりぞけられ、はかり知れぬほど高い超越的な起源と目的とにかわって人間の欲求が芸術の起源および目的とされるとき、芸術の意義は実際に減少するかのごとく、考える動因をなお多くの人に残している。ところが反対にこのことによってこそ芸術の現実的価値は高まるのである、なぜならばかくして人間の幸福に役立つ諸活動の間における論駁の余地なきかつ名誉ある地位が芸術に与えられるからであり、また人間の幸福に役立つことは人間の側からの高い尊敬をうける完全な権利をもつことを意味するからである。人間は彼の幸福に役立つものの前に跪拝する。人間はパンを、人間がそれを食とするがゆえに「父なるパン」とよぶ。人間は大地を、それがわれわれを養うがゆえに「母なる大地」とよぶ。父と母！ あらゆる讃辞はこの神聖な名の前には無にひとしく、あらゆる美辞をつらねた賞讃も子の愛と感謝の情の前には空であり無価値である。かくてまた科学も人間の幸福に役立つがゆえにこの感情に値し、かくて芸術も人間の幸福に役立つときこの感情に値する。そして芸術は人間に多くの、多くの幸福をもたらしている、なぜならば芸術家の、特に詩人の名に値する詩人の作品は、著者の正しい表現によれば、「生活の教科書」である、しかもすべての人、他の教科書を知らずあるいは好まぬ人々さえ楽しみつつ利用する教科書である。人間にとってのこの高い、美しい、福祉的な自分の意義を芸術は誇りとすべきである。

チェルヌィシエフスキー氏は、われわれの意見では、きわめて悲しむべき誤りをなした、芸術の実践的意義についての、その生活および教育に対する有益な影響についての思想をより詳細に展開しなかったことによって、もちろん彼はこの行論によって自分の題目の限界を逸脱することになる、しかしときとしてかような侵犯は問題の説明のために根本的に必

要である。現在では、チェルヌィシエフスキー氏の著作の全文が、生活にとつての芸術の偉大な意義にもとづく芸術への尊敬によってつらぬかれているにもかかわらず、この感情をみようとしないう人々がでてくるかもしれない、いづこにもこの感情のために特別な数頁がささげられていないからである。著者は生活に対する芸術の有益な影響を十分に評価せず、あるいは現実の提供するすべてのものの前に無意味に跪拝するのであると思うかも知れない。これについてチェルヌィシエフスキー氏がどう考えているか、あるいはこの場合他の人々がチェルヌィシエフスキー氏についてどう考えるだろうか、われわれにとってどうでもよいことである。彼は自分の思想を述べつくさずにおいた、そしてこのような過怠の責任を負うべきである。しかしわれわれは現実に対する現代科学の態度を特徴づけるために、著者が説明することを忘れた点を説明しなければならない。

われわれを圍繞する現実、人間の欲求に対するその無数の現象の関係において、なにか同質な、同性格のものではない。この概念をわれわれはチェルヌィシエフスキー氏のもとにも見うける、「自然は、——と彼はいう、——人間や人間の事業について、彼の幸福や破滅について知ってはいない、自然は人間に対して公平無私である、それは人間にとって友でもなく敵でもない」(42頁)、「しばしば人間は自分の側においてなんらの罪過なしに苦しみ、破滅する」(45頁)自然は必ずしも人間の欲求に相応しない、それゆえに人間は自分の生活の安寧と幸福とのために客観的現実を多くの点において改変しなければならない(99頁*)、自然を自分の実際生活の欲求に適應させるために。実際人間を圍繞する諸現象のなかには、人間にとって不快であり有害であるものが多い。部分的には本能が、またそれ以上に科学(知識、思考、経験)が人間に理解する手段を与える、現実のいかなる現象が人間にとってよいものであり好

都合であって、それゆえに人間の協力によって支持され、発展させられるべきものであるか、また現実のいかなる現象が人間にとって苦しく有害であって、それゆえに人間の幸福のために絶滅され、あるいは少なくとも弱められるべきであるかを。科学はさらにこの目的を実行する手段をも人間に与える。このことについて芸術は科学にきわめて大きな援助を与えるのである、芸術は科学によって得られた諸概念を人々の巨大な大衆の間に普及する特別な能力をもっているのである、なぜならば芸術作品に親しむことは、科学の公式や峻厳な分析に親しむよりも人間にとってずっと容易であり、魅力的だからである。この点において人間生活にとっての芸術の意義は底しれず大きい。芸術の作品によって人間に与えられる享樂については語らない、なぜならば美的享樂の人間にとっての高い価値について論ずることは全くよけいなことだからである、芸術のこの意義についてはそれでもなくともあまりに多く語られ、いまわれわれの関心をひいているところの、芸術の他のより本質的な意義については忘れられている。

* この自評における本文の引用は、初版本における頁をあげてある。訳者はこれを本訳書の頁に改めた（さらに、同時代社刊「チエルヌィシェフスキー著作選集I」の頁に改めた）。しかしこの個所のみは本文中に該当箇所が見当たらないのでそのままにしておく。

最後にまたチエルヌィシェフスキー氏はきわめて重要な誤りをなしたとわれわれには思われる、いわゆる人間の「観念的」志向に対する現代の実証的あるいは実践的世界観の態度を説明しなかったことによって、——そしてここにもまた誤解に対して抗弁する必要がしばしばおこる。科学によって採用される実証性とは、無味乾燥な人々の間に支配していると

ころの、そして人間の観念的な、しかし健全な志向と対立するところの、卑俗な実証性とはなんの共通点ももっていない。われわれのみたごとく、現代的世界観は科学と芸術とを食物や呼吸と同様な、人間の緊要な欲求とみている。これと全く同様にこの世界観は、人間の頭脳または心のうちに根拠をもつところの、人間の他のあらゆる高い志向に対して好意的である。頭脳と心とは真に人間的な生活にとって胃の腑と同様に必要である。もし頭が胃の腑なしには生活できないとすれば、胃の腑もまた頭がそのために食物を見いださないときには飢えて死ぬであろう。それだけではない。人間はかたつむりではない、人間はひたすら胃の腑の充満のためにのみ生きることはできない。思想的な道徳的な生活（肉体が健康であるとき、すなわち人間生活の物質的方面が満足に進行しているときに充分に発展するところの）——これこそ真に人間にふさわしい、そして人間にとってもっとも魅力ある生活である。現代科学は人間を寸断するものでなく、彼の美しい肉体を外科的切断によってゆがめるものでなく、人間生活を頭脳のみあるいは胃の腑のみに限ろうとする古くさい志向をいずれも愚劣なもの、破滅的なものと認めている。この両器官はひとしく必然的に人間に属するものであり、そのいずれの器官の生活も人間にとってひとしく本質的なものである。それゆえにこそ科学はあらゆる高きもの、美なるものへの高潔なる志向を、飲食の欲求と同様に人間において本質的なものとみとめている。科学はまた愛する、——なぜならば科学は抽象的なものでなく冷ややかなものではないから、科学は愛しもするし怒りもし、迫害もするしまた保護もするものである、——科学はまた人間の道徳的欲求に配慮するところの、あるいはそれらの欲求がしばしば充足されないのを見て悲しむ高潔な人々を愛するのである、自分の同胞の物質的欲求について配慮する人々を愛すると同様に。

われわれは著者によって述べられた思想を叙述し、われわれの気づいた彼の誤謬を表面に出しかつ修正した。いまやわれわれには彼の著書について自分の意見をのべるのがのこされている。読者のみたとおり、評者は自分の信念において、チェルヌィシェフスキー氏が自分の研究においてそこから出発しているところの見地に、全く相似た見地に立っている。それゆえにわれわれの批評は叙述と、現代科学に属するところの諸原則の個別的問題への適用の方法にのみふれたのであった。われわれはいわねばならない、著者はこれらの一般的諸原則を理解する相当の能力とこれらの諸原則を所与の問題に適用する相当の手腕とを示している、彼にはまた所与の諸概念のうち現代科学の一般的見解と一致する要素と、これと一致しない要素とを識別する能力がみとめられる。ゆえに彼の理論は性格の内的統一をもっている。どの程度までこの理論が正当であるか、これは時が決定するであろう。しかし著者によって述べられた思想が注目に値するものであることを喜んでみとめるとともにわれわれは著者に属するのはほとんどつねにこれらの思想の叙述と適用だけであって、思想そのものは科学によってすでに与えられているのである。しからば彼の叙述の評価にうつろう。われわれによって指摘された多数の誤謬と手おちとは、チェルヌィシェフスキー氏がこの研究を書いたときには彼自身のうちに彼によってひき出されて思想の発展の過程が進行して居り、この思想はまだ完全な、全面的な、確立した体系に達していなかったことを示している。もしも彼が自分の著作の刊行を延期したならば、彼の著作はその本質においてではなくとも少なくともその叙述において一層の学問的価値をもち得たであろう。彼自身次のごとく述べたときこのことを感じていたようである、「しかしもしも生きた現実への人間思想の関係に対する今日支配的な見解から私によってひき出される美学的諸概念が私の叙述においてまだ不完全であり、一面的でありあるいはぐらついているとしても、しかしこれは概念そのものの欠陥ではなく、私の叙述の欠陥にす

ぎないことを期待するものである」(19頁)。これはまったくそのとおりである。著者が達した諸概念は大部分において現代的諸見解と相応するものといわねべきである、また叙述はもはや著者のみに属するものであって、不十分な場合がきわめて多い。

この著作の形式についてもなにか言う必要がある。われわれはその形式に断然不満である、なぜならばそれは著者の目的——彼がそれにもとづいて芸術理論を建設しようと努力するところの思想に対しては注意を喚起すること——にそわないようにわれわれには見えるからである。彼はこの目的を達するのに二つの方法によることができた、すなわち、あるいは言語の難解、無用の学者からの無数の引用、あるいは学者気取りでいる人々に対してきわめて効果をもつところのこれと似たような仕組みを用いて自分の著作に陰気な、しかし重々しい概観を付するか、あるいはわが文学の時の問題への適用によって自分の一般的思想に生きた興味をあたえることによって。チェルヌィシェフスキー氏が第一の手段に訴えようとしなかったことに対して彼を非難はしまい。しかし彼があれほど多くの人々の興味をひいているところの今日の関心事と科学の一般的原則との生きた関連を多数の実例によって示すことを決意しなかったことについて彼を非難するものである。どうしようがあるか。一般的原則が一般の興味をひきつけるのは、それが讃辞か弾劾かの出発点として役立つときのみである、これなしでは一般的原則は、それ自身としていかに重要なものであろうと、ほとんどなんびとも注目されずに終わる。しかしチェルヌィシェフスキー氏は彼の前にあらわれた賞讃のための、また特に弾劾のための数多い機会を利用することを欲しなかったか、あるいはなし得なかった。彼は今日文学界を賑わしている名の一つにもふれなかった。それゆえに彼の著作は文学の諸問題に心をよせている人々に対して、

著者が、もちろん、自分の叙述した思想によって与えんとしたよりも、はるかに少ししか印象を与えることができないであろう。